

現在完了形の用法に関する一考察  
— 過去時制、現在完了進行形との比較を中心に —

伊関 敏之\*

**A Study on the Usage of Present Perfect**  
**— with special reference to the Comparison of Past Tense and Present Perfect Progressive —**

Toshiyuki ISEKI

**Abstract**

In this paper, we will mainly examine the usage of Present Perfect. In this connection, we will especially refer to the comparison of Past Tense and Present Perfect Progressive.

In School English Grammar, it is often said that Present Perfect has three or four usages, namely, completion, result, experience, and duration.

But making a careful observation about it, its usages overlap with Past Tense and Present Perfect Progressive in many respects.

Therefore, we will consider the usage of Present Perfect in various aspects.

**序論**

本研究では、cognitive な視点を取り入れながら現在完了の用法について考察し、その本質に迫ることを目的とする。現在完了には、完了・結果、経験、継続という3つないし4つの用法があるということは、学校英文法でよく知られていることである。しかし、よく観察してみると、過去時制や現在完了進行形と重なり合う部分も多いことがわかる。事実、アメリカ人は現在完了で言うべきところを過去時制で言うまで述べている本もある (Turney 1988, pp.186-8)。また、ある本に載っている例文を見てみると、just now という語句が現在完了と共に用いられていた (Halliday 1994<sup>2</sup>, pp.201-4)。これはどういうわけであろうか。以上のような点について、私見を交えながらいろいろと考察していくことにする。先行研究においてもいろいろなことが述べられており、大変有益な論考が多いが、筆者なりの独自の見解を述べているところが特に注目される。

---

\* 北見工業大学教授 Professor, Kitami Institute of Technology

## 1. 現在完了の用法について

### 1. 1 従来の考え方とその発展

現在完了で最も大切なことは「過去の動作・状態 [p.p.] を関連させながら、実は現在の状態 [have (or has) ] を述べている」という点である。(これは、英語が「動作」よりも「状態」(=結果)を非常に重要視するという性格に起因する。)従って、次の3つの文のように、過去の状態・動作 [下線部分] を関連させながら現在の状態 [太字部分] を述べる時に現在完了を用いるのである。

イ. 「ちょうど手紙を書き終えた (ので一休みできます)。」 (*I have just finished writing (or have just written) a letter.*)

ロ. 「彼はアメリカに行ってしまいました (ので今いません)。」 (*He has gone to America.*)

ハ. 「私は以前アメリカに住んだことがあります (からアメリカのことはよく知っています)。」 (*I have lived in America before.*)

ニ. 「私はロンドンにここ十年間住んでいます (からロンドンのことはよく知っています。)

なお、これらの文を、一般の文法書的な分類にあてはめると、イ. が「完了」、ロ. が「結果」、ハ. が「経験」、ニ. が「継続」ということになる。しかし、現在完了に関しては、分類よりもまずは「過去の状態・動作の結果としての現在の状態」としてとらえるのが何よりも大切である (岩垣 1980, p.56)。ここまでは、従来の学習英文法書で述べられていることと同じ内容であるが、さらに次のように話が展開されている。

一般に「現在完了」には「完了」「結果」「経験」「継続」の四つの意味があるとされているが、「継続」と他の三つは分離して考えなければならない。ということは、「完了」「結果」「経験」は、いわば同じだからである。どういう点で同じかという点、例えば、

*I have written my composition.* (私は作文を書いてしまった。) [完了]

*He has gone to America.* (彼はアメリカに行ってしまった。) [結果]

*He has written a book.* (彼は本を書いたことがある。) [経験]

と分類されるものは、それぞれ、

*The composition is ready.* (作文はできている。)

*He is now in America.* (彼は今アメリカにいる。)

*He is an author.* (彼は著述家である。)

ということで、これらはすべて「現在の状態」(＝結果)を表している。従って、現在完了の用法は、「結果」と「継続」に分ければよいのである。それでは何故「結果」を「完了」と「経験」に分けるのかというと、一つの動作の結果は、① なされた事物に残る直接的結果 (Immediate Result) と ② 行為者の経験・知識・性格などに残る永続的結果 (Remoter Result) の二つに分けることができるからである。そして、① を「完了」(・・・してしまった)、②を「経験」(・・・したことがある) と分けているのである。

次例参照：－

① *I have read this book, so I will lend it to you.*

(僕は読んでしまったから、君に貸してあげよう。)

*I have not the money. I have given it to my brother.*

(その金は持っていないよ。弟にやってしまったから。)

② *I have read this poem somewhere, but I forget where.*

(この詩はどこかで読んだことがあるが、どこであったか今ちょっと思い出せない。)

*I know that beggar. I have given him some money before.*

(僕はあの乞食を知っている。前に金をやったことがあるから。)

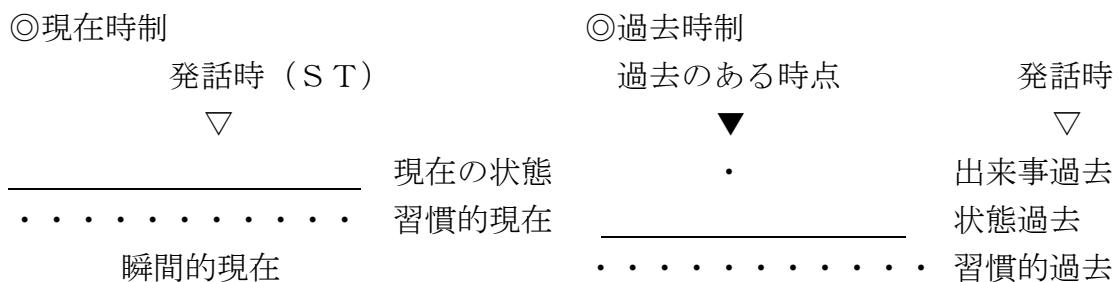
－岩垣 1980, p.57

このような考え方は、従来の学校英文法で教えられていることよりもさらに発展した内容であると言えよう。ある面において、現在完了の本質を追究しているところがあるからである。

## 1. 2. cognitive な視点を取り入れた考え方 (私見)

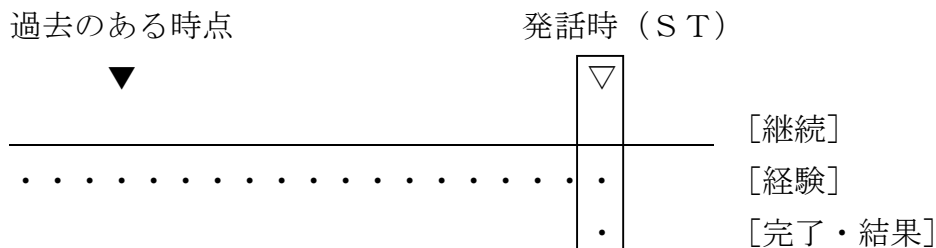
上述の考え方を参考にして、cognitive な視点を取り入れながら考察してみる。私見では、現在完了を図式化すると次のようになる (現在時制・過去時制もあわせて載せている)。

Figure 1. 現在時制・過去時制・現在完了の発話時 (S T = Speech Time) との関係を図式化したもの



－Quirk *et al.* 1985, p.180, p.186; 鈴木・安井 1994, p.170, p.187

◎現在完了



現在時制と過去時制の図を基にして、現在完了の図を表してみると上のようになる。この図を見るとわかるように、現在完了で特徴的なのは  の部分に焦点 (focus) が当てられているということである。その他の部分

( \_\_\_\_\_ , . . . , . の部分) に関しては、同じ発想でよいということである。これが意味することは、別の言い方で言えば、現在完了は現在時制や過去時制と重なり合う部分も多いということである。

このことを認知言語学の根幹をなす考え方の一つであるプロトタイプ理論を使って図に表すと、次のようになる。

Figure2. 現在完了を中心にすえた場合のそれぞれの時を表す言い方との関係

F = Focus

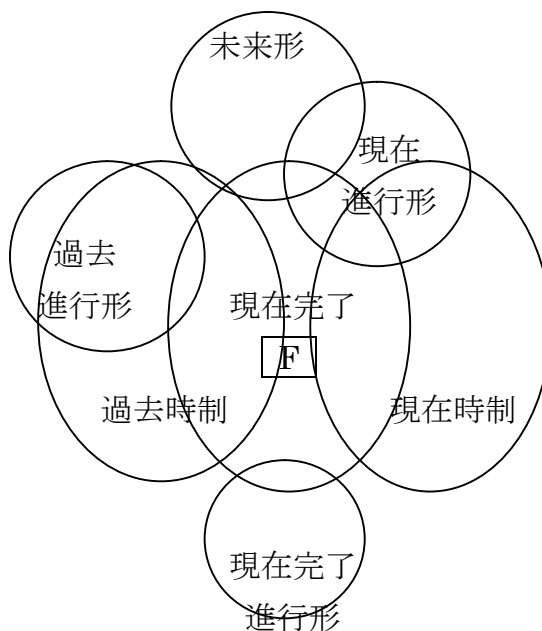


Figure 1. の  は、ここでは F に相当する (つまり、現在完了のプロトタイプ的な使い方である。そこを中心にしていろいろ overlap しているのがわかるが、特に過去時制と重なり合う部分が多いことに注目する必要がある

る（ここでは[F]の部分も過去時制と重なり合っている）。上述のように、今までの見解では、現在完了は過去の状態・動作を関連させながら、あくまでも現在の状態を述べる時に用いられるということであるから、[F]の部分も含めて過去時制と一番重なり合う部分が多いというのは新しい見方である（この辺の事情については次節で述べる）。

それから、[F]についてであるが、この中核的な部分が意味することは、関心は発話時（S T）にあり（それに至るまでの経緯は \_\_\_\_\_ でも・・・でも・・・でもよい）、いずれにせよ何か（断続的に）継続してきたことが発話時（現時点）で表出されたものと考えてよい。ただし、言葉は発せられた瞬間にはもうすでに過去のことになってしまうので、どうしても過去時制との接点が大きくなるのである。

従って、そのように考えてくると、現在完了を使うか過去時制を使うかの判断はあまり厳密なものではなく、話者の主観的判断によることが多いということがわかる。

## 2. 過去時制との接点

現在完了は過去時制と重なり合う部分が一番多いということを上で述べたが、ここでは具体例を通して見ていくことにする。Turney (1988, pp. 186-8) では、アメリカ人は現在完了を過去でいうという項目を設けて興味深い説明をしている。ただし、Turney が問題にしているのは、現在完了の用法のうち完了・結果・経験の用法に限られているので注意する必要がある。つまり、継続用法だけは別に考えなければならないことを意味しているのである（上述の岩垣 1980 でも触れられていた）。なぜそうなるのかというと、以下の例を見ればわかるように、現在完了が過去時制と言い換え可能なのは、継続用法を除いた完了・結果・経験の用法であるからである。

(1) a. Have you eaten lunch yet? b. Did you eat lunch (yet)?

(1 a) はイギリス人が、「ランチ、もうすませた？（まだだったら、一緒に食べない？）」と聞く時に用いることが多い。(1 b) は yet を付けて考えると、「お昼、まだ、食べた？」というへんな表現になる。yet を取った表現に至っては、「お昼、食べ終わった？」であり、過去でもいつの話なのか、漠然としている。つい、When? (先週のお昼のこと？いつのランチのことをいってるんだい) と、聞きたくなくなってしまう。イギリス人としては、yet があるからこそ、完了を呼ぶ、セリフが完了になる。ところが、アメリカ人の同僚の言語学者に言わせると、

特にユダヤ系アメリカ人は、彼らのイディッシュ語 Yiddish の影響からか、*Did you eat lunch yet?* と、*yet* (すでに、もう) を付ければ完了だとわかるから、過去形だっていいじゃないか、となる。なるほど、アメリカ人の手にかかると、英語が単純化されていくなあ、と感心する一方、耳ざわりでも、そんな英語が主流になるのか、少し危惧の念にかられる (Turney 1988, pp.186-7)。

上例の説明からもわかるように、特にアメリカ人においては、過去時制が現在完了と変らない意味で用いられていることがわかるのである。こうなると、問題は主観的か客観的かということよりも、アメリカ英語かイギリス英語かという社会言語学の領域に近づくことになる。いずれにせよ、上述のような例においては、現在完了で言っても、過去時制で言ってもよいという結論になる。次の例はどうか。

- (2) a. She arrived yesterday. b. She arrived just now. c. She has arrived just now.  
d. I just finished my homework. e. I have just finished my homework.  
f. Did you ever see a shooting star? g. Have you ever seen a shooting star?

上の (2b~2g) はそれぞれペアになっている。従来の考え方では (2b と 2c) のペアについては (2b) の方が、(2d) と (2e) のペアについては (2e) のう方が正しいとされてきたが、これらはいずれも正しいことになる。(2f) と (2g) のペアについても同様である。例えば、(2c) の言い方について見てみると、*just now* は明らかに過去を表す語句であるから現在完了とは一緒に用いられないと一般的には言われてきた。しかし、よく考えてみると、日本語でいう ほんの少し前も今ちょうども時間的にはほとんど差がないということがわかる。従って、(2c) のように、*just now* と現在完了を組み合わせても OK であるし、(2d) のように *just* と過去時制を組み合わせても OK だということになる。つまり、従来言われてきたように、過去時制と現在完了の区別がそれほど厳密なものではなく、お互いに重なり合う部分も多いということを示しているのである。ということは、*just, just now, now* のような 3つの表現は、用法的にも意味的にもお互いに重なり合う部分が多いということでもある。

- (3) a. He just left. b. He has just left. c. He left just now.  
d. He has left just now. e. He has left now. f. \*He left now.

さすがに *now* と *left* の組み合わせだった例である (3f) は不可であるようだが、その他はみな OK である。

たった今 (3f) は不可であると述べた (cf. 小西・南出編 2001<sup>3</sup>, p.1278) が、(3f) のような表現まで可能であると述べているものもある (cf. 田中・武田・

川出編 2003, pp.1121-2)。

ここでは、次のような説明および例が載っている。「[現時点に隣接する過去・未来]今さつき、たった今;今度は、この次は / I saw a flash of lightning now. 今、稲妻が光った / I cleaned this table. What shall I do now, Mom? このテーブルきれいにしたよ。ママ、今度は何やるの」。

要するに、現在を基点として、現時点に隣接する過去・未来と一緒に now を用いてもOKであるということである。従って、この論法でいけば、(3f) のような言い方も可能であるということになる。

N. B. この now という語に関して注意すべきことがさらに2つある。

① 次のような例では、now は過去形と共に用いてもよいとされている。

He was now a national hero. 彼は今や国民的英雄であった。

—竹林・吉川・小川編 1994<sup>6</sup>, p.1227

ただし、このような例は [物語の中で] 用いられるとされているので、いわば特殊な状況のもとでの用法であるということが言えるので、上記の説明においては考慮しないこととする。

② 英語の now と日本語の「今」とでは、カバーする領域が異なっているということである。つまり、日本語の「今」は now より対象となる時間が短く、むしろ at the moment に当ることも多い (cf. 小西・南出編 2001<sup>3</sup>, p.1278) ようである。ちなみに、at the (very) moment という語句を同英和辞典で調べてみると、次のように書かれている。「[現在時制で] 今のところ; ちょうど今; [過去時制で] ちょうどその時」。現在時制と過去時制とにまたがって用いられるということは、at the (very) moment という語句は日本語の「今」よりも使用範囲が広いということが言えよう。「今」→ at the (very) moment now の順に、使用範囲が広がっている。つまり、日本語の「今」は、上記の訳語の「ちょうど今」とほとんど同じ使われ方しかないということになるであろう。このように見ると、英語の now という語の使用範囲の広さが、取りも直さず上記 (3c) ~ (3f) までに至る例文での使われ方に反映されているということがわかるのである。

上述の説明からもわかるように、過去時制と現在完了の区別がそれほど厳密なものではなく、お互いに重なり合う部分も多いということが例証されたのである。このことを、鈴木・安井 (1994, p.278) では、過去時制が現在完了相と同じ意味で用いられる例も存在するとして、次のような例を挙げて、興味深い説明をしている。

(4) a. I saw him a moment ago.

b. I~~ø~~ve just seen him.

(5) a. He went a moment ago.

b. He~~ø~~ just gone.

—Palmer 1974, p.77

「(4 a) – (5 a) の過去時制と (4 b) – (5 b) の現在完了相の文とが同じ意味を表すということは、いずれの形式も、同じ状況を正しく指し示すのに用いられるということである。(4 a) – (5 a) のように、過去時制の文に a moment ago が用いられていると、その出来事が起った時は、現在に限りなく近づくことになる。つまり、現在に限りなく近い過去は、現在とかかわっているという現在完了の意味と、限りなく「同じ」になるのである。I knew など、それを忘れるということが介在しにくい事柄であれば、過去時制の I knew が成り立っていれば、I know という現在時制、あるいは I~~ø~~ve known という現在完了相が成り立っているということになる。このように、過去時制と現在完了相とが限りなく「同じ」意味を表しうるという場合はあるが、そのような場合であっても、過去時制と現在完了相とがまったく等価であり、区別がなくなるということではない。」と書かれている。確かに、過去時制と現在完了相というお互いに異なった表現形式がある以上、両者が本質的にまったく等価になるということは現実にはないであろう。しかし、事実ある使い方においてはそのようになっているということも、今までの説明から明らかである。両者の本質を理解し、どこまで用法が overlap しているかを検討していくことが今後必要である。

### 3. 現在完了進行形との接点

(6) a. I have been studying English for ten years.

b. I have studied English for ten years.

従来一般的な英文法書では、「[動作動詞] を使って「継続」の意味を表すには現在完了進行形にする」というのが普通の説明である。

ここでも今まで一般的に言われてきた説に反して、(6 b) のような言い方も OKであると筆者は主張する。事実、ネイティブ・スピーカーに確認したところほとんど違いがないそうである (Phillip J. Robberson 氏の御指摘による)。

江川 (1994<sup>14</sup>, p.41) には、次のような記述がある。「<注意>上のように現在までの動作の継続を表すには動作動詞の完了進行形を使うが、一部の動作動詞は単なる完了形でもよい。We have studied / have been studying English for three



years. 単なる完了形か完了進行形かによって微妙な差はあるが、諸君自身の英語としては「動作の継続は完了進行形」ということにすればよい。」とある。一部の動作動詞とは何なのか、また微妙な差はあるとあるが、それはどのようなものなのか、ここでは述べられていない。さらに、江川 (1991<sup>3</sup>, pp.241-2) では、もう少し詳しい記述が見られる。

「B. 現在完了と現在完了進行形 次の動詞は現在完了でも継続を表せる。

expect, hope, keep, learn, lie, live, rain, sit, sleep, snow, stand, stay, study, teach, wait, want, work

**I have lived / have been living** in New York *for the past ten years.*

(ここ 10 年間ずっとニューヨークに住んでいます)

**She has learned / has been learning** to play the piano *since she was three years old.*

(彼女は 3 歳のときからずっとピアノを習っています)

**I have long wanted / have long been wanting** to visit Naples.

(長い間ナポリを訪れたいと思っていました)

《参考》これらの動詞の現在完了は、期間を示す副詞語句がないと継続の意味を表すことができない。

**I have (already) learned** 4,000 English words. <完了>

([もう] 英単語を 4 千語覚えました)」とある。

ただし、動作動詞の場合は、たとえ“発端”や“期間”を示す副詞(句・節)がついていても、‘have +p.p.’ は、例えば、**I have learned English for five years.** (私は五年間英語を習ってきました。[現時点までの経験] / 私は五年間英語を習ったことがあります。[過去の経験]) のようになり、決して「継続」の意味にはならない。「継続」を表したければ、**I have been learning English for five years.** (私は五年間英語を習っています。) としなければならない。」と主張している学者もある (cf. 岩垣 1980, p.62)。

解説 B. 各例とも、単なる現在完了と現在完了進行形との間に差があるかどうかは問題になるが、大体において差はないと考えてよいであろう。ただ、上にあげた動詞の中でも lie, sit, stay, wait など通例あまり長くない継続動作を含意する動詞には、現在完了進行形が好まれる (Leech, *Meaning*, §77)。つまり、次の例では明らかに b) の方が自然である。

a) **I've sat** here all afternoon. (午後ずっとここに座っていました)

b) **I've been sitting** here all afternoon. (同上)

これらの動詞の現在完了は期間を示す副詞がなければ継続を表せないと言っ

だが、逆に現在完了進行形はそういう語句がなくても継続の意味を表す。これは継続を表す現在完了と現在完了進行形との大きな相違点と言えよう。

The road is wet, because it *has been raining*.

(ずっと雨が降っていたから、道がぬれている)

Cf. The road is wet, because it *has rained* this morning.

(けさ雨が降ったから、道がぬれている)

—江川 1991<sup>3</sup>, p.242

上記下線部のような説明は、確かに継続を表す現在完了と現在完了進行形との大きな用法上の相違点となっはいるが、それでもなお両者の（微妙な）意味の違いを説明したことにはなっていないのである。

強いて両者の違いを説明すれば、次のようになるであろう。

① *I have lived* here for three years. と *I have been living* here for three years. との間に実質的には大した違いはない。その間の違いは、*I live* と *I am living* とのそれと同じく、*have been living* の方が叙述がより生々としていて、ときに感情的色彩が加わるということであろう (cf. 太田 1954, p.66)。

② *The Browns have lived* in that house since their marriage. と *The Browns have been living* in that house since their marriage. という2つの文の違いについて—2番目の表現は、話し手が一時的とみなす状況を描写している；従って、ブラウン夫婦が結婚したのはそんなに前のことではないということを暗示している (cf. Leech, 1987<sup>2</sup>, p.49)。

③ *I have studied* English for five years. と *I have been studying* English for five years. という2つの文の違いについて—前者は[完結] 後者は[未完結] を含意する。従って、前者では現時点よりも先に英語の勉強をするという含意は必ずしも含まれておらず、やめてしまっても構わないわけであるが、後者ではこれから先も継続して英語を勉強していくという含意があるということである。

ただし、この違いは微妙なものらしく、両者には違いはほとんどないと言っているネイティブ・スピーカーもいる (Phillip J. Robberson 氏の御指摘による)。

以上のような、3つの違いをどの程度まではっきりと認識するかは、話し手の主観によるところが大きいと思われる。

#### 4. その他注意すべきこと

(7) a. I hear that he is sick. b. I heard that he is sick.

c. I~~ve~~ heard that he is sick.

2. 過去時制との接点という項において、I know も I knew も I~~ve~~ known も意味的には限りなく近くなるという趣旨のことを述べたが、上述の(7a)～(7c)のような言い回しについても同じことが言える。つまり、彼が病気であるということを誰かから聞いている(つまり、知っている)というのが(7a)の場合で、誰かから聞いた(だから、知っている)というのが(7b)の場合であり、(7c)も誰かから聞いた結果が現在にまで残っている(つまり、知っている)ということなので、結局3者ともほとんど違いがないということになる。このような使い方は、say; tell; hear; write; read; find; forget; come などの動詞に限られるとしている。ただし、もはや確定した表現になってしまっている場合には、伝える意味内容が異なる場合もある。次の各文を比較せよ。

(8) a. Where do you *come* from? (お国はどちら?)

b. Where *have* you *come* from? (どちらからいらっしゃいましたか?)

(9) a. I *forget* his name. (名前を忘れた、ちょっと思い出せない。)

b. I *have forgotten* his name. (名前をすっかり忘れて、どうしても思い出せない。)

(10) a. I *hear* that he is going to resign. (彼はやめるそうだ。) [単なる噂]

b. I *have heard* that he is going to resign. (彼はやめるとのことだ。) [確かな聞き込み]

—岩垣 1980, p.39

なお、I hear = I have heard の語法については、安藤 (1996, pp.75-9) に詳しい。

その他、特殊な用法としては、次のような説明がある。

① 完了相と似た意味を持つ進行相

We~~re~~ eating more meat since war.

(cf. We~~ve~~ been eating more meat since war.)

He~~s~~ going to work by bus since his car broke down.

(cf. He~~s~~ been going to work by bus since his car broke down.)

—Palmer 1974, p.69

進行相の文と完了進行相の文とはほぼ同じ意味であるとされるが、完了進行相の文よりも、進行相の文のほうが、行為が未来にも続いていくという感じが含意される。

この他、単純形、進行相とも意味の変わらないものという項目で興味深い説明がなされているが、現在完了とは直接的には関連がないのでここでは割愛する。

—鈴木・安井 1994, pp.254-8

最後に、現在完了と現在時制との接点として、次のような例も見受けられる。

It~~ø~~ been [is] now nearly ten years since we last met.

(この前私たちが会ってからもう 10 年近くになる)

—井上・赤野編 2003, p.1371

## 5. 結論

以上の議論から、一番最初に問題点として挙げた **just now** は実は過去時制だけではなく、現在時制でも現在完了でも使用可能であるというわけである。また、現在完了は過去時制と用法的にも意味的にも重なり合う部分が多いことがわかり、その他現在完了進行相、現在進行相、現在時制などとも重なり合う部分があることを例証してきた。

歴史言語学的に見ると、姉妹言語であるドイツ語と同じように、過去時制との区別があまりつかなかったところからスタートして、過去時制とは明確な違いがある英語独自の現在完了形を発達させてきた。その辺の事情については、中尾 (1979)、中尾・児馬編 (1990)、中尾著、児馬・寺島編 (2003) などを参考にするとよい。

しかし、最近では、継続用法を除く用法 (完了・結果、経験) のすべてに渡って、過去時制との区別がなくなっている。つまり、現在完了形と過去時制とを意味の区別なく使う傾向があると言えよう。従って、意味的には、昔の現在完了形に少し逆戻りしているということになるので、とても興味深い現象であると結論できる (回帰現象)。

このような言葉の回帰現象は、特に語彙の面でよく起っているようである。例えば、日本語を一つ例に取ってみよう。それは、「エロ」ということばの意味変化である。80 年前「エロ」は、超イケてる言葉だったようである。つまり、いい意味で使っていた。その後、周知のごとく、「あまりよろしくない意味合いの言葉」として定着していった。しかし、21 世紀になると、「エロ」は再び意味に関しては「良化」の方向に向いてきていると言えるであろう (cf. 伊関 2011, p.190)。文法 (統語論) の分野でも、このような回帰現象が起ったとしても不思議なことではないと思われる。

次節の6. 問題点および今後の課題③でも述べるように、この小論では、現在完了形には2用法があるという考え方を支持する。Bolingerの言うように、1用法で十分であるという考え方の妥当性を検証し、2用法説と比較検討することが筆者にとって今後求められる一番の課題である。その際には、継続用法の扱い方および考え方がポイントになることは言うまでもない。

例えば、田中・佐藤・河原(2003, p.74)には、次のような例がある。

「A bad cold has been annoying me for more than a week.

(ひどい風邪で1週間以上悩まされている) <継続>

確かに、現在完了形のかわりに過去形で済ますことができる場合も多いけれども、継続の用法だけはそうすると意味が変わってしまう。上述の例文で、was annoying を使うと、現在と切り離された過去のことになって、今は元気なんだろうという感じになってしまう。」と書かれている。つまり、継続用法だけはその他の用法と別扱いすべきであるという主張を支持する一例であると言えよう。

## 6. 問題点および今後の課題

少なくとも次の6つが考えられる。

- ① 今まで例証してきたように、現在完了を中心として過去時制、現在完了進行相、現在進行相、現在時制などのお互いにパラフレーズ可能であるとされている表現同士が、どこまでほとんど意味に違いをもたらすことなく使用することができるのかということとをさらに究明していくこと。
- ② 小西(2003, pp.66-9)では結論として、just now には現在のところ英米の語法書はもちろん、辞書にも完了形との共起はあげられていないとの理由で、「現在完了形と共に用いる人もあるが、避けた方がよい」との考え方を示しているが、筆者はこの考え方に否定的である。なぜなら、英米を含む9名のインフォーマントに、I've just now received word that they've arrived safely. (ちょうどいま、彼らが無事に到着したという知らせを受けた。)という例を示したところ、全員がOKであると認めたそうである(cf. 柏野1999, pp.164-5)ので、語法書や辞書に載っていないからといって、just now は現在完了と共に用いるべきではないと決めつけるのには問題があると言わざるを得ない。語法書や辞書にそのような使い方が載っていないから、使ってはならないということであろうか。そのような理屈が究極的に進んでくれば、例えば、Have you ever seen a UFO? という意味で、Did you ever see a UFO? などとは言えなくなってしまうであろう。また、この問題にはアメ

リカ英語かイギリス英語かというような社会言語学的な視点からの考察も必要とされる面もあるようである。さらには、ネイティブ・スピーカーにおいても個人的にどのような使用の習慣があるのか、あるいはその時の気持ちの持ちようによって無意識的に現在完了と過去時制とを自由に使い分けているという可能性もあり、一概には言えないが、**just now** と現在完了との共起は一般的に認めてもよいと思われる。なお、「**just now** + 現在完了」に関して、**just now** の現れる位置という視点から面白い考察がある。中位 U S 83%、UK 39%、後位 U S 68%、UK 63%。後位については米英共に過半数の人が容認しているのに対し、中位が米英でこんなに差があるのはどうしてかという疑問である (cf. 小西 2003, p.68)。これについての解答は、今後の課題としたい。

③ 柏野 (1999, p.172) には、次のような興味深い説明がある。

「本書では、上で述べたように、従来 of 慣例にならって、現在完了形を「完了・結果」「継続」「経験」の3用法に分類する立場をとる。このように、現在完了形を3用法に分類したわけであるが、ここで強調したいのは、この3用法には「現在との関連性」を最も顕著に表すものから希薄にしか表さないものまで段階性が認められるということである。結論から述べると、「現在との関連性」を最も強く表しているのは、「完了・結果」用法で、「継続」用法がそれに続き、「経験」用法は「現在との関連性」を示しはするが、その現れ方が希薄であると言える。これを図示すると次のようになる。

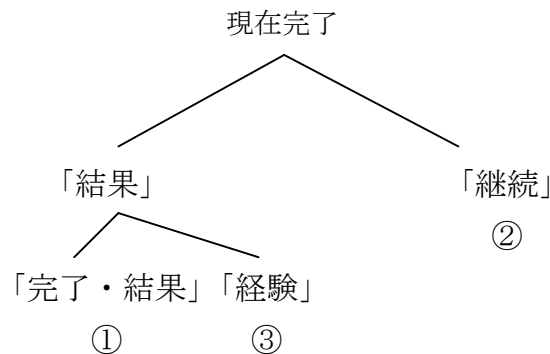
**完了・結果 > 継続 > 経験** と書かれている。

この他、現在完了形には、「完了・結果」用法を二つに分けて4用法に分類しているもの、「経験」を表す用法と「完了・結果」を表す用法を「不定完了」(indefinite perfect) として一つにまとめ、現在完了形の用法を2分類する立場もある。さらには、「現在完了形の意味は一つしかなく、文脈に引かれて用法を認めるのは誤りである」という人までいるようである (柏野 1999, pp.171-2)。

この現在完了形の意味は一つしかないとする見解は、中右実訳 (1981, pp.35-7) に基づくものである。

ここで筆者の考え方を示しておくことにする。現在完了形の用法は、まず大まかには二つに分けて考えて(「結果」と「継続」の二つ)、その「結果」の用法の中でも「完了・結果」というプロトタイプ的な用法から、「経験」というプロトタイプから少し離れた用法までとする。それとは別

に、「継続」という用法を独立して設定するというものである。図示すると、次のようになる。



この図の中での①～③という数字は、上記の「現在との関連性」という立場から見たいわば現在完了らしき順序を示しているものである。このように、大きく「結果」と「継続」の二つに分類した上で、プロトタイプのなものから順に見ていくと、「完了・結果」→「継続」→「経験」という順になるようなので、この現在完了の用法の複雑さがよくわかる。

以上のような私見を示したものの、「継続」の用法の位置付けなどいまだにすっきりと分類できていない部分もあるので、今後さらに検討していきたい。

- ④ 鈴木・安井 (1994, p.272) では、解釈という点から次のような興味深い説明をしている。「多くの現在完了相は、基本的には、経験の意味と継続の意味とをもっているが、現在まで続いているということが明示的に副詞で表されているか、あるいは、文脈によって明らかであり、経験の解釈の可能性がきわめて低いか不可能である場合を除けば、聞き手は現在完了相を自動的に経験の意味で解釈するのが普通である。例えば、(11a) は、since 1982 という現在まで継続していることを示す副詞があるので継続の解釈をうける。これに対して、(11b) は、そのような副詞がないので経験の解釈となる。

(11) a. Since 1982 John has lived in Paris.

(1982 年以来ジョンはパリに住んでいます)

b. John has lived in Paris.

(ジョンはパリに住んでいたことがあります)

プロトタイプの度合からすれば、(11b) のような文は継続の意味に解釈してもよいように思われるが、そうはならないで経験の意味に解釈するのが普通であるというのはどうしてであろうか。また、例えば、次のような文

はどうであろうか。

(12) I have read this book.

(私はこの本を読んだところだ [完了・結果])

(私はこの本を読んだことがある [経験])

この場合には、(12) の文が [完了・結果] の意味であるのか、[経験] の意味であるのか判別することが一般的には不可能であると言われているが、なおその場合においても、現在完了相の意味（用法）を解釈する際に、優先順位があるということはないのであろうか。つまり、現在完了のプロトタイプ度と解釈における優先順位との間には何か関係があるのであろうか。あるいは、両者の間に何も相関関係はなくとも何か別のことが言える可能性があるのであろうか。今後の課題としたい。

⑤ 安藤（1996, pp.53-66）では、第4章 完了形の諸問題というところで著者独自の提案をしているので、その見解を参考にしながら、今後検討していく価値が十分にあるものと思われる。

⑥ 現在完了形の論考の中に取り入れるべき視点としては、大まかに言って次の2つの立場がある。

1、認知言語学的な立場

2、社会言語学的な立場

例えば、I met him on [in] the street. (私は通りで彼に会った) と言いたい時には、次のように考える。

1、の立場にある人たちは、異なった前置詞が使われることによって、私が歩いている通りの風景が変わってくることを指摘する。根本的に言って、「形が違えば意味が違う」のであるから、当然このような違いも十分に考慮すべきであると考えてるのである。

一方、2、の立場にある人たちは、この場合異なった前置詞が使われるのは、アメリカ英語とイギリス英語の違いによるものであると主張する。ということは、細かな認知的な違いなどは考慮していないということになる。

要するに、今回のような現在完了形の諸問題を考察する上では、どの程度社会言語学的な問題として捉えるべきなのであろうか。換言すれば、どの程度まで認知言語学的な視点を取り入れて説明すべきなのであろうかということである。

さらには、一つの考え方として、中尾・児馬編（1990, pp.109-10）には次のような大変興味深い記述がある。「なお、過去時制による現在完了用法



が現代アメリカ口語英語に見られる。Vanneck (1955) はこれは古い用法の名残りではなく、アメリカ英語における新たな発達とする。しかし、Visser (1963-73: §754) は “Mayflower English” の残存であろうという。」と書かれている。

このような点に関しても考慮すること（歴史言語学的な立場も考慮すること）が、今後必要になってくるかもしれない。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、鶴岡工業高等専門学校元非常勤講師の Phillip J. Robberson 先生に貴重な御助言を頂いた。ここに厚く感謝の意を表する次第である。

\*本論文は、第30回 全国英語教育学会 長野研究大会（2004年8月7日 於：J A長野県ビル）における口頭発表の原稿を加筆・修正したものである。

## 参 考 文 献

### 辞典

- 井上永幸(他編) (2003) 『ウィズダム英和辞典』 東京：三省堂.  
 小西友七(他編) (2001) 『ジーニアス英和辞典 第3版』 東京：大修館書店.  
 竹林滋(他編) (1994) 『新英和中辞典 第6版』 東京：研究社.  
 田中茂範(他編) (2003) 『Eゲイト英和辞典』 東京：ベネッセコーポレーション.

安藤貞雄(1996) 『英語学の視点』 東京：開拓社.

Bolinger, D. (1977) *Meaning and Form*. London: Longman. 中右実(訳) 『意味と形』.  
 東京：こびあん書房, 1981.

Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha. 安井稔(訳) 『現代英文法総論』 東京：開拓社, 1994.

江川泰一郎(1991<sup>3</sup>) 『英文法解説一改訂三版一』 東京：金子書房.

- \_\_\_\_\_ (1997<sup>14</sup>) *A New Approach to English Grammar*. 東京：東京書籍.
- Halliday, M. A. K. (1994<sup>2</sup>) *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold. 山口登・笈壽雄(訳)『機能文法概説－ハリデー理論への誘い－』東京：くろしお出版, 2001.
- 伊関敏之(2011)『英語の研究と教育－ことばの世界への誘い－』東京：成美堂.
- 岩垣守彦(1980)『英語の要点』静岡：増進会.
- 柏野健次(1999)『テンスとアスペクトの語法』東京：開拓社.
- 河上誓作(編著) (1996)『認知言語学の基礎』東京：研究社出版.
- Leech, G. N. (1987<sup>2</sup>) *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- 中尾俊夫(1979)『英語発達史』東京：篠崎書林.
- \_\_\_\_\_ . (児馬修・寺島迪子編) (2003)『変化する英語』東京：ひつじ書房.
- 中尾俊夫・児馬修(編著) (1990)『歴史的にさぐる現代の英文法』東京：大修館書店.
- 太田朗(1954)『完了形・進行形』東京：研究社.
- 鈴木英一・安井泉(1994)『現代の英文法 第8巻 動詞』東京：研究社.
- 田中茂範・佐藤芳明・河原清志(2003)『チャンク英文法』東京：コスモピア.
- Turney, A. (1988)『英語のしくみが見えてくる－英語のクセをつかめ－』東京：光文社.